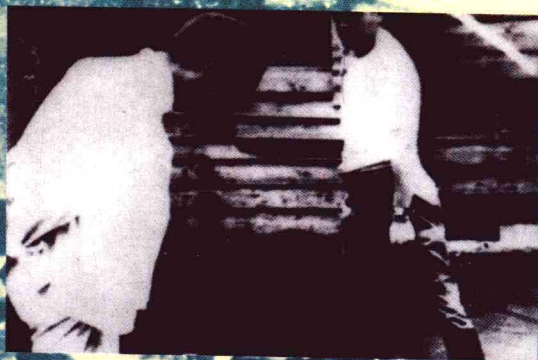


徐志耕 著
秋 子 訳

南京大虐

巨殺



中国 北京 外文出版社

图书在版编目(CIP)数据

南京大屠杀/徐志耕著.

—北京:外文出版社,1994(2001.4重印)

ISBN 7-119-01500-1

I. 南... II. 徐... III. 纪实文学—中国—当代—日文

IV. I25

中国版本图书馆CIP数据核字(2001)第15185号

责任编辑 高苗 杨春燕

封面设计 王志

外文出版社网址:

<http://www.flp.com.cn>

外文出版社电子信箱:

info@flp.com.cn

sales@flp.com.cn

南京大屠杀

徐志耕 著

*

©外文出版社

外文出版社出版

(中国北京百万庄大街24号)

邮政编码 100037

外文印刷厂印刷

中国国际图书贸易总公司发行

(中国北京车公庄西路35号)

北京邮政信箱第399号 邮政编码 100044

1994年(32开)第1版

2001年第1版第2次印刷

(日)

ISBN 7-119-01500-1/I.294(外)

04500(平)

10-J-2738 P

南京大虐殺

徐志耕 著
秋子 訳

外文出版社

北京

日本語版責任編集 高 苗 楊春燕

表紙デザイン 王 志

南京大虐殺

1994年初版発行 2001年第2刷発行

著 者——徐志耕

訳 者——秋 子

出版者——外 文 出 版 社

(郵便番号 100037 北京西城区百万莊大街24号)

発行者——中国国際図書貿易総公司

(郵便番号 100044 北京P.O.Box399)

印刷者——外 文 印 刷 廠

ISBN 7-119-01500-1/I · 294 (外)

10-J-2738 P

04500

亡くなつた人々

生き残つた人々

雄々しく戦つた人々

のちの世代の人々

——にこの書物を献げる

動かすことのできない事実

——『南京大虐殺』に寄せて

この本は歴史を復元する形でまとめたルポルターージュであり、わが民族の苦難の縮図です。ここには、五十年前のできごと、人類史上でも驚くべき大悲劇——南京大虐殺が描かれています。

一九三七年十二月、日本侵略軍は南京を占領し、以後六週間に及ぶ血なまぐさい殺りくをくりひろげました。当時、街路は屍の山となり、長江の水は赤く染まりました。史料の記載によれば、日本軍の南京における集団虐殺は二十八件、計十九万人、個別の殺りくは八百五十八件、計十五万人、いずれも南京の一般市民と武器を放棄した国民党将兵で、合わせて三十数万人が虐殺されたのです。

この世界を震撼させた暴行は、当時各国から激しい非難を浴びました。一九四六年、極東国際軍事法廷は日本人戦犯に対する判決文書の中で、「日本兵はまるでとき放たれた野獣の群のようにこの都市を踏みにじり、殺人、強姦、略奪、放火をほしいままにした」と記しています。極東国際軍事法廷は、南京市民に極悪非道の限りをつくした華中

派遣軍司令官松井石根に絞首刑の判決を下し、もう一人の元凶、第六師団長谷寿夫は南京側に引き渡されたのち、一九四七年に死刑に処せられました。

この作品は初めて全面的かつ具体的に「南京大虐殺」の全経緯を描き出したものです。筆者は大量の生きた事実を用いて日本侵略軍の血なまぐさい蛮行を明るみに出すと同時に、このような悲劇をひきおこしたさまざまな原因を指摘しています。温故知新、古きを温めて新しきを知る。この作品で過去を知ることが、必ずやわれわれに新しい啓示を与えてくれることでしょう。

中日両国は海を隔てた隣国です。中日両国民は数千年にわたる友情の歴史を有しています。しかし、忘れてならないのは、両国関係の歴史にかつて侵略、被侵略の年月が存在したということです。歴史は忘れ去ることの許されないものです。

人類の自殺的行為を許してはなりません。

平和の永遠に続くことを祈ってやみません。

一九九三年十二月

南京市市長 張耀華

まえがき——地中からの叫び

わたしは、歴代王朝の陵墓で名高いこの都市にやつて来た。二四〇〇年あまり前、越王勾踐が秦淮河のほとりに越城を築いて以来、ここは絶えず戦火にみまわれてきた。明の孝陵、靈谷寺、雨花台、中山陵、そして吳王墳、南唐二陵、六朝王陵……その一つ一つに石碑が残されている。そして、石碑の一つ一つが先人の栄光と、この古都の流した血とを語りかけてくる。

わたしは通りや路地のあいだを歩きまわった。一軒一軒の戸をたたき、苦難の体験者である老人たちを訪ねてまわった。彼らの苦しみと涙を大きな花輪のように綴り合わせ、あの不幸だった人々の墓前にささげたいと思う。

老人たちの穏やかな日常をかき乱したことは、申しわけないことだった。胸の奥深く埋められた思い出したくない痛みにわたしは手を触れてしまった。あの時の恐怖、苦痛、憤りが一度に噴き出した。四牌樓の街沿いに住む涂宝誠老人が古い板壁をさし示した。「ここに、おやじが殺されたときの血の跡があつたんだ。いまはほとんど消えてしまったがね。日本兵が残した心の傷だけは死ぬまで消えないね」。長白街に住む熊華福老人は、日本軍によって一家離散した体験を語ったあと、吐き出すように言った。「ふつうの苦しみならどんなことだって我慢できるさ。だけど亡国の民になったらおしまいだね」

わたしは桐と棕櫚の木が濃い影を作っている古い建物の戸を押し開けた。小柄な白髪の婦人が笑みを浮かべながらおぼつかない足どりで出迎えた。彼女は手渡した紹介状に目を落としたとたん顔色が変わった。深いしわにおおわれた顔に涙がしたり、両手、両足が激しく震えた。夫や兄を含め四人の肉親すべてが日本侵略軍に殺害されたあと、五十年ものあいだ孤獨を守ってきた人だった。

まなざしの隠やかな宏量法師は敬虔な仏教徒である。日本侵略軍の南京における暴行についてたずねると、老人はまっ白なひげを震わせながら、僧侶たちの受苦を語ってくれた。彼の得度をしてくれた梵根法師は長生寺の住職であったが、日本兵の来たときはちょうど本堂で弟子たちとともに念仏をささげている最中であつた。兵隊たちは凶暴だった。仏弟子たちを本堂の回り廊下に引き出して、一人ずつ銃弾を浴びせ、次々に十七人を殺した。

長江の水は今もとうとうと流れている。この岸边で三千人以上が一度に殺された際かろうじて生き残つたその人は、五十年前の現場をさし示して声をふるわせた。「あの時はこの波打ち際が死体だらけじゃつた。川の水がまっ赤じゃつた」

血の海、火の海、人々の心に深く刻まれた傷跡……。夏淑琴おぼさんは目をまっ赤に泣きはらしてわたしに言った。「わたしはまだ八歳でした。日本兵がやって来てうちの家族九人のうち七人が殺されたんです。残つたのはわたしと乳飲み子の妹だけです。毎日、泣いて、泣いて、泣いてねえ、目が泣きつぶれてしまつたんですよ。あれから五十年たつけど、わたしのこの目はずっとよく見えないんですよ」

苦難を体験した老人たちは、殺された人たちの写真をさし出して見せたり、襟元を捻上げて傷跡を見せたりしてくれたりした。この人たちは心の奥の奥にひそめておいた、人に語るのものはばかられる心底からの恨

みと嘆きを、わたしにうち明けてくれた。ああ……、踏みにじられ、凌辱の限りを受けた同胞たちよ！

百人近い老人たちが声をふるわせてあの耐えがたい歴史のひとこまを語るのを聞いたとき、わたしの心はおののき、まるで神経が強い電氣にふれたようだった。なんとということだ。この深い緑につつまれた古い都は、ほんの少し前まで一面の血と炎の紅蓮くれないの中にあつたのだ。

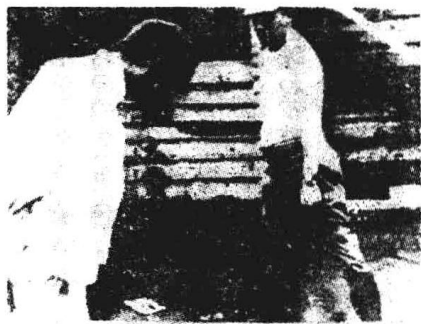
南京、この古都はあまりに多くの血を流した。だからこそ、その土から前にもまして濃い緑が生い茂つたというのか。うつそうとした緑に囲まれたこの都市が、一瞬見知らぬ街に変わったようだった。今は雑踏でにぎわう鼓楼の繁華街は、あの時、累々たる死屍ししの山だった。そして、車が激しく行きかう新街口にそびえる全国一高い金陵ホテル、ここは五十年前、馬車ひきの崔金貴がむしろ小屋に隠れて日本兵を逃れた場所だ。彼の話によれば、「日本軍が街に入つて二日目には、新街口のあたり一面に中国人の死体が散乱していました。向かい側のあの太い黒い円柱の中国銀行、あれは当時日本軍の司令部だった所です。松の木がうつそうとしている靈谷寺のあたりも、あの時は死体がごろごろして足の踏み場もないくらいでした。三千人以上の人間をいっしょに埋めて、〈無主孤魂碑〉と書いた石碑を一本立てたんですよ」

当時の光景を目撃した外国の宣教師が言っている。ダンテの『神曲』に描かれた地獄を知っている人なら、南京陥落時のようすが想像できるかもしれない、と。

一九三七年十二月十三日から一九三八年一月までの四十日余りのあいだに、日本侵略軍は南京で三十万の中国人を殺害した。三十万の人間、三十万の命を奪つたのである。三十万人が並べば杭州から南京まで連なる距離になる！ 三十万人の体を積み上げれば三十七階建ての金陵ホテルの二倍の容積になる！ 三十万人の血は千二百トンになる！ 三十万人を列車に収容すると、二千五百両以上必要だ！

世界を震撼させた「南京大虐殺」はアウシュビッツの強制収容所とともに、人類が人類を撲滅しようとした大悲劇である。獣性が人間性を滅ぼし、野蠻が文明を扼殺した記録である。それは人が野獣になりさがつた日々だった。

わたしは輝く天国の門から暗黒の地獄の門の中に下りて行った。そこでわたしが目にしたものは、かつて見たことのない数知れぬ異形の者たちだった。人なのか、獣なのか、悪霊なのか……。耳にしたのは、かつて聞いたこともない、残忍な哄笑と、阿鼻叫喚と、命乞いの声のまじりあつたすさまじい声だった。それはこの世の不幸、人類の不幸の縮図だった。



獣性が人間性を滅ぼした 50 年前
の大悲劇——「南京大虐殺」

目次

まえがき——地中からの叫び……………	7
第一章 災厄の日々……………	17
南京陥落す 一七	
とうとうたる長江の流れ 二四	
ひらめく軍刀 三五	
第二章 青天白日旗と日章旗……………	39
国民党軍の将校たち 三九	
城下に迫る日本軍 四五	
血みどろの戦闘 五一	
紫金山主障地／光華門／雨花台と中華門／西部防衛線／烏龜山砲台	
潰走 六四	
第三章 「安全区」レポート……………	73

人道主義 七六

中国人と苦難をともにする 八三

ミス・ヴォートリン 八九

同じ同胞として 九四

きよしこの夜 一〇二

第四章 波打ち際の殺りく……………

中山埠頭(死者五千余人) 一一二

生存者——梁廷芳の証言／目撃者——今井正剛の証言／生存者——劉永興の証言／

日本軍兵士——田所の証言

石炭港(死者三千余人) 一一九

生存者——潘開明の証言／生存者——陳徳貴の証言／下関発電所の記念碑について

漢中門外(死者二千余人) 一二二

伍長徳老人の証言

草鞋峽(死者五万余人) 一三六

本多勝一記者の報告／生存者——唐広普の遭遇／日本軍少佐太田寿男の供述

燕子磯(死者五万余人) 一五九

第五章 敬虔な人びと……………

仏門の弟子たち 一六五

棲霞山仏教学院、融通法師の証言／宏量法師の証言

キリスト教徒 一七二

カトリック信徒、朱寿義老人の証言

ムスリムたち 一七六

沈錫恩長老の証言

第六章 南京市内の惨状……………

「百人斬り」競争 一八三

聞き書きの記録 一八六

何守江(男・六九歳)の証言／楊品賢(男・七二歳)の証言／張玉珍(女・八一歳)の

証言／孫慶有(男・七四歳)の証言／魏廷坤(男・訪問時七三歳・故人)の証言／左

潤徳(男・六六歳)の証言

新聞切り抜き 一九八

『ニューヨーク・タイムズ』一九三七・二二・一七(ダーディン記者)／『新華日報』一九五一・二・二三／『朝日新聞』一九八四・八・五／『新華日報』一九五一・二・二四
／『朝日新聞』一九八四・六・二三／『新華日報』一九五一・二・二四

七家湾の七体験者 二〇五

その一——袁昌華(男・六六歳)／その二——夏春英(女・六三歳)／その三——伍貽才(男・六二歳)／その四——蘭桂芳(女・六五歳)／その五——陳玉蘭(女・六八歳)／その六——汪昌海(男・六四歳)／その七——趙温氏(女・八五歳)

第七章 放火と略奪…………… 215

第八章 一家皆殺し…………… 227

破壊された家庭 二二七

中国人と日本人の心の対話 二三〇

六人の子を殺された楊余氏(南京)／大分県S・Tさん(日本)／夫を殺された鄧明霞(南京)／宮崎県N・Mさん(日本)／妻を殺された薛世金(南京)／愛媛県M・Sさん(日本)／両親をなくした姜根福(南京)／兵庫県K・Kさん(日本)

第九章 女性たち——十四人の「秀英」たち…………… 249

徐秀英／金秀英／馬秀英／劉秀英／ト秀英／王秀英／季秀英／三人の李秀英のうち
の一人

第十章 強制連行と使役……………

南京から江寧へ 二六七

張文斌／崔金貴／劉永興／姜根福の父親徐長富

ある使役夫の見聞 二七四

水責め、火責め 二七六

徐吉慶／侯占清

第十一章 表現しがたい罪行……………

第一の手紙——読者へ／第二の手紙——今は亡き婦人の霊へ／第三の手紙——辱し
められた婦人へ

第十二章 不安の中の仮寝……………

軍人狩り 二九三

売国奴たち 三〇五